

物語 藤裏葉

の如き主体の感情の表出の純度の高い例がほとんどである

こうした点から考えると、源氏物語において増大した感情表出性というのは、単に主体側の感情・気持ちの表出にウエイトを置いた表現ではなくて、客体的対象の意識もかなり強く、しかしかの物(あるいは事、様)に対して、主体がしかじかの感情・感想をいさぐという型の表現が多いようである。

こうした、対象物の明示から来る文中の客体的事象の描出の明確さと、又一方それに対する主体側の生々しい感情・感想の表出が、同一の文の中に混合し融合して、一つの調和を生み出しているところに、いわゆる源氏物語の情緒性の豊かな、うるおいと現実感のある、独特の文芸味が完成したのではなからうか。

結び

源氏物語と宇津保物語を比較して論じるつもりが、源氏物語の用例を検討することに忙しくて、宇津保の方をとり上げるスペースがなくなつてしまつたが、大略して、

源氏においては宇津保にくらべると連体修飾や連用修飾よりも述語やと下接型・おぼけ型の用例数がふえているようである。

まだまだ調査は不完全で、納得のいかない現象も多いが、この対象の性格の記述と主体の感情の表出の要素の均衡という見地から整理を進めていけば、今まで意味の把握がむづかしかつた語などの意味を解明して行く上にも大きな手がかりになるだろうと思われる。

(鈴鹿工専講師)

神道集巻第九「北野天神事」ノート(二)

—その「文学」性—

村上 学

さきに記したように、神道集巻第九「北野天神事」は安楽寺本系統の天神縁起、特に黒川本、梅棒坊本系統の縁起本文に甲類第一種本の縁起の本文を適宜きざみ込んで作りあげられたものであるが、この説話のみならず、例えば真字本曾我物語と神道集間に五十数箇所、相互の分量の約一割にわたる同文箇所が発見されたり、また巻四の十九話から巻六の三十二話にいたる説話に引用されている経文がかなり正確である事など、神道集の説話の蒐集は書承によるものと考えなければならぬ点が多い。

従つてわれわれはそれだけ神道集の性格をつかむ手がかりを強く持つている筈であるが、ままた神道集について指摘されるようにトレーガーの面の研究はある程度の進展を見たとはいえないものの、<sup>①</sup>神道集の性格を内在的に探る試みが殆んどされていらないのは、一面その教義的な本性が難解である事のためであるが、それと同時に、その書承性の認識の甘さ、引いてはそれから来る原拠追求探索の

不徹底さを因とする面もあるように思われる。今幸にしてこうした面における考察の手がかりを得た以上、これについて臆測を逞しくして神道集の性格を内在的にさぐつてゆく足場の一つにしたいと思う。その前提として、原拠になつた安楽寺本系統の北野天神縁起の性格をまず考えてゆきたい。

(一)

もともと北野天神縁起に登場する道真は統一された性格を持つていない。既におおの氏<sup>②</sup>、篠田氏<sup>③</sup>がふれて居られるように、天神縁起は、優れた才能を誇る貴族として道真を画いた第一部、すさまじい執念をはらさずにはおかない火雷天神となつた彼の怨霊を画いた第二部と、贈官・社壇創設以降無実の罪を免れしむる慈悲神として北野天神を画いた第三部が、素材の未消化のまま、対等

の比重を以て、しかも相互にある程度独立して並列されて居り、下手をすれば三分裂しかねない構成の弱さを内包しているのであるが、原本の構成をそのままひききついでいるが故に安楽寺本系統の天神縁起にもその感免れえない。しかも後に見るように各モチーフを「話」として色どりゆたかにしようとする原理が働いているが故に、一見その分裂感はずます強く感じられるのである。しかし、考え方によつてはこの縁起には他系統の縁起とは異なつた原理が発見されるように思われる。

先にふれたように、この系統の縁起は乙、丙系統の縁起が原拠の縁起を全体に書きかえ、書きくずして行つた処に成立しているのは異なり、省略と増補という二つの方法で一部原本の佛を残しながら全体としては大きな変容をなしたたのであるが、その省略と増補は必ずしも前記の三部分で均しく行われたものではなかつた。すなわち、第一部、道真の才能を表わす部分は、処々増補された箇所はあるものの、第二部の、法性房化現から宮中落雷、法性房渡河参内、淨蔵加持（時平死亡）、日藏冥途記など怨霊のすさまじさを記した諸段のいちぢるしい増補に比べるとその増補の度合は少なく、第三部、奇子託宣以下の北野神社の創設靈験談の部分は逆に削除の

みが目につくといつた偏りが発見されるのである。これは三部分が等しい重さで並列されている原縁起にひきくらねながらも、この系統の縁起の改変者が第二部「怨霊」の部分に重点をおきかえて縁起を再構成したことを示すのであるが、さらに各増補諸段の変容を検討してゆくと、この重点の移動にはたらいいた原理は、一つは道真の受難1 復讐の物語へ縁起を集約化することであつたように思われる。そうした意味で事件の発端となつた、朱雀院行幸の段の変容から考えてゆきたいと思ふ。

この段の原拠になつたものは、永観二年および正暦三年の託宣であるが(4) 甲類本の本文は(乙・丙類本も同じである)この二種の託宣をつぎはぎして作成されているものの、それらの構成に忠実に従つて、宇多法皇、醍醐天皇が道真一人に政治を託さんと密議するのを時平が洩れ聞き、道真の失脚を企てるように書かれて居り、時平の讒言は必ずしも不当ではないように構成されている。(むしろ非は両帝にあるように構想されているといえよう)これに対し、安楽寺本系統の縁起では、両帝の密議はほとんど省略されて居り、このために結果的には時平の行動だけが浮び上つて、彼の讒言は自衛のための行動ではなく単に嫉妬心によることとなり、責任を時平

一人にかぶせて道真の流譎のいわれの無さを浮き出させ、事件の非条理性を強調することになつていたのである。

この変容は、つづく時平讒言の段にうけつがれて居る。

甲類本が、やはり原拠(正暦三年託宣)⑤に従い、

ア 左大臣ねんごろに無実を讞奏し(原文のまま)⑥

イ 一味と道真を呪詛したが

ウ 道真は呪詛を防ぐ術を施し、子孫は九代の今にいたるまで繁昌している

と述べているのに対し、安楽寺本系統では、ウを省略し、イ、アの順序に構成を変更して、アにあたるものを左のように創作している。

時平大臣、延喜ノ御門ニ参リ無実ノ讞奏ヲソセラレタリケル

「(君)未ダ知食ズヤ、菅丞相コソ不思議ノ事ヲ巧ミ候ナレ、申スニツケテ恐レ<sup>(マ)</sup>ドモ、君ハ不賢ニワタラセ給フ、式部卿ノ宮ヲ位ニツケ奉リテ、找世ヲト

ラント計ライ申ナレバ、内々法皇モ御許シ候也、君ステニ押籠ラレ給ハヌ先ニ彼仁ヲ弘ヒ給フベシ」トソ申サレタリケル。帝是ヲ聞クスニ逆鱗不<sup>(レ)</sup>覺、タチドコロニ菅丞相ヲ流罪スベントソ御定アリケル<sup>(7)</sup>。原拠の永観二年託宣のこの部分は、菅原氏のうち淳茂の

子孫が代々偏業をうけついで繁栄しているのは天神の加護力によるものである事を強調するためのもので、流罪の発端を述べるために作られたものではない。甲類本縁起はこれを事件の発端に転化するためにアを加えてここに置いたのであるが、他の諸段にしばしば発見される破綻と同じく、原拠につきすぎて完全な脱化を行うことができず、次に続く流罪の宣旨が下つたと記す一文との間に断絶が感ぜられるのである。これに対し、安楽寺本はウを省略する事により道真に受難者としての受身の性格のみを残し、宣旨の下つた動機を直接時平の讒言によるものという形で明確化するため、イ・アの順序に原拠を変更しアを増補・具体化して、事件の合理化をはかり時平の「悪役」としての造型を一步すすめているのである。

こうした事件を事件として集約してゆく傾向、特にそれに伴う時平悪役化の傾向が、第二部、おの氏の所謂「怨神」の部分で、怨霊のすさまじさを強調し、時平に対する報復の凄惨さを浮びあがらせる傾向と一致するのは当然である。宮中雷電の段の原拠は大鏡の時平伝であるが、(8) 甲類本縁起が原拠に記す、時平の訛によつて雷電が鎮まつたプロットを「にらみやりてぞる給ひける」という程度で打切つたのは、道真を祭神とする北野天神

縁起の性質上当然ではあるものの、未だ時平の剛胆な性格を原拠のままに残しているのに対して、安楽寺本縁起は、原縁起の時平の言動にさらに大げさな言辞を加えて、八大竜王などに祈願し、「大音声ニノシラレタリケル」にもかかわらずさらさら止まない雷に結局「御ハカセ翰ニ納テ手ヲ合セツツ、只観音々々トゾ仰セラレケル」と唱えざるを得ないやカリカチュアされた時平の像をつくり出したのをはじめ、すさまじい雷電に半ば失神しながらあわてふためく帝以下の人々のリアルな描写を加え、次の法性房渡河の段のすさまじい増補とあわせてかなりの劇的な場面を構成しているのである。

さらに、事件の結末である浄蔵加持（時平死亡）の段に同じように大きな増補と変改がされている事を注意したいと思う。

この段の原拠は現在の処不明であるが、甲類第一種本には左のように記してある。

その日の午時ばかりに善相公のとぶらひに参侍ければ、おとどの左右の耳より青竜の頭をさしいでて善相公につげ示しける様

われ申文を作りて梵天帝釈に訴申により、はやくことはりを蒙りて怨敵を報せんとするほどに、尊閣の

と、原縁起には全くない浄蔵の加持の様を詳述した後でヨリマシニ託宣モナクシテ、病人（ノ）左ノ耳ヨリ青色シタル毒竜一ツ頭サシ出シテ、口ヨリホムヲモヤシタリケル。ミルニ目モアテラレズ、人ミナ倒臥ニケリ。浄蔵ハスコシノ臆気モナク、空色ニ月出シタル扇ハラハラトヒラキツカイト、託宣ヨクシ給ヘトゾコソキタリケル。青竜暫ヘモノモイワザリケルガ、浄蔵ノ又イノラントシ給ケルヲミテ

イタクナ御房責給ヒソ、是ホドサシアラハレテ対面ヲシナガライカガ物申サデハ侍ベキ、我ハモト朝家ニツカヘ奉リテ忝モ君ノ御宝ヲタリキ、一天四海ニ慈悲ヲタレテ、君ノタメ臣ノタメ民ノタメ物ノタメ何事カ一事一言モツラカラザリシ、器ニツケテ万機ヲ政務スベキ宣旨ヲ蒙テ候シカドモ、上ニ左臣アリ給サキニ下ト申テ時平ガ撰録ヲウバウ事ナカリキ、然ニナンノ恨ニカ相モヨホシテ無実ノ奏ヲバイタサレケルゾ、借老同穴ノ契リ深ク、至幸鐘愛ノ志イトヲシカリシ妻ニモワカレ子ニモワカレテ、八重ノ塩地ニヲモムキ、九重ノ都ヲヲイ出サレ奉リシ時ノ恨ミト只今ノ歎キトイヅレカヲトルベキヤ、筑紫ニテ中一年思ヒシヲモヒ、山トカナレリ、海トカツモリテ世ヲハカナクセリ、ヒトトセ雷トナリテ其阿党ヲ報セントセシカドモ、僧正ニフセガレテ叶ハザリシガ、今又イキドヲリヲハラサンガタメニ竊ニココニ

男浄蔵たちまちに降伏せんとす。制せられよ  
としめし給ければ、相公、葉公が真竜にあへりけんた  
ましいいかくやと覺て、この由をしるしてつかはしき。  
浄蔵これを見て、ゆふかげになりければ漸しりぞき出  
にけり。そのとき本院大臣はやがて薨じ給ぬ。御年三  
十九とぞうけ給侍（五条菅家本）

この段の構成は、甲類縁起成立より成立年代はやや下るが大法師浄蔵伝にほとんど同じ形の説話が記されているから、おそらく原拠のままであろう。ここでも、甲類本では叙述を浄蔵の側から行い、道真の怨霊には浄蔵の法力に降伏される程度の威力しか持たせていないという、構想上の弱点を示している。これに対し、安楽寺本の縁起では

般若心経一二巻ヨミテ、又天衆地類遍向シ奉テ、葉師  
經ノ金毘羅大将トウチアゲテ、千衆ノ二十八部衆ヲ言  
塵サワヤカニ屈請セラレタリケレバ、万人ミナ心肝ニ  
ソミテタツトガリケリ。今ハ物ノ気モ慈マレ納受ヲタレ  
テ、心スコシトラクラントヲボシキ時、大音声ヲバナ  
ゲカケテ、一心ニ五体六根ヲセメテ陀羅尼神呪ヲミテ  
給ケレバ、万人身ノ毛ヨダチ、イカナル物ノケカ出ザ  
ラント思ニ

キタレリ、時ステニ窮リ、力皆ヨハリヌ、御声ノカ  
ルルニ、イタヅラゴトナイノリ給ケレバ、目ノ前ニ  
ロシテ不覺ヲシ給フナ、カク申サンホドアランズル  
イカニモイノラセ給ヘ、日ノ入合ニハ一定ゾ  
トテ頭ヲヲヒキ入テケリ。上下万人ナクヨリ外ノ事ナ  
ケレバ、浄蔵イトマ申シテ、タチニケリ。浄蔵立イ  
デラレケレバ、日イリアヒヲモ待ズシテ時平公死給ヒ  
ケリ。耳目ノフルル処、涙ヲ催サズト云事ナシ。御年  
ヲ申セバ四十九ニ成給ヒケル。惜カルベキ齡ノホドナ  
レドモ、娑婆世界ノ習イハカヲヨバヌ事也、

と、長々と青竜に恨み言を述べさせているのである。この段でも、安楽寺本系の縁起の本文は原縁起を単に増補して作成されたものではなく、原縁起の叙述の立場を逆にして、浄蔵の法力も怨霊の一念には及ばないように描き出して前後の統一をはかり、しかもそれに伴つて、原縁起の、怨霊の示現するのが浄蔵の父、三善清行に對してであつて浄蔵は清行に託宣を伝えられて退出するといふ、いわば間接的対決をさせている構想をかえ、「空色ニ月出シタル扇ハラハラトヒラキツカイト」「託宣ヨクシ給ヘ」と「ヲコゾク」浄蔵と、いつ果てるとも知れない怨言をくどくどと述べたてる毒竜を直接対決させる構想にして、この場面に陰惨な緊迫感を与え、以て道真の怨念のすさまじさを効果的に表現しようとして作成されたものであると言えよう。

とにかく、道真の受難とその報復の事件は、時平の怪死を以て一段落する。今まで長々と見て来たように、原資料の性格をかなり生のまま残し、そのため全体の構想上の弱さを露呈していた原縁起に対し、この縁起では時平の悪役としての造型を一步すすめながら説話全体の力点を事件そのものに集約してゆく傾向のある事を知ることができるのである。それを逆の形で示したのが、第三部、北野神社の草創、靈験譚の部分の簡略化であるといえよう。特に、ここでは師輔社壇建立、その祭文、作者のこれに対する讃辭の部分が全て省略されている事の意味を考えてみたい。

いうまでもなく、北野神社の創設は、元来北野に存在した雷神(天神)と道真の怨霊が習合して行われたものであるが、<sup>(9)</sup>その草創も新しく、かつ私祀の社として出發したため、同類の神である賀茂神社などに比して初めは微々たる存在であつたことは諸史料の明かに示す所である。この私祀の小社が僅かの間に上下の崇敬をあつめ、二十二社の一に加えられるまでに至つたのは、あいにく天災や疫病のためもあるが、同時に師輔にはしまる藤原氏の尊崇、庇護によることが大きかつた事も、正暦三年の託宣に見えるように<sup>(10)</sup>明かである。従つて、その転

われる。その一つは、各段を「話」として色彩をゆたかにしてゆこうとすることであり、もう一つは、仏教の俗的な宣伝を別途とすることであるが、まず前者についてやはり作品に即しながら見てゆこうと思ふ。

さきにふれたように、安楽寺本系天神縁起の第一部は、第二部に比して増補の度合が少なく、<sup>(11)</sup>縁起の変改者は所謂秀でた文人としての道真の像を重視してはいないように思われるのであるが、こうした第一部においても、各々の説話(段)自体には多少の増補はされている。例として、一時廿首の段の増補・変改を考えてみたい。この段の原拠は菅家文章(五)の十七首連続する詩の序である。

東宮寓直之次、下令曰、去春十首既知急捷、今取當時二十物重要、某不停滯、即奉令之後不敢固辭、自酉二刻及戌二刻齋數僅成、慎令旨也。(後略)<sup>(12)</sup>

甲類第一種本はこれをそのまま翻訳して記している。つぎのとし令旨をうけ給、ごぞの春の十首に製作のはやきことをしりにき、当時の二十のものをとりて題として進ずべしと、すなはち停滯せず、また固辭せずして、酉の二刻より戌の二刻にをよびて二十首の詩をつくりて令旨をつつしみ給、漢家本朝かかるたぐひは今

回点にたつ師輔の社壇創立のことは「北野天満宮の縁起」を語るときには省略してはならないものであつた。事実今までに管見にふれた甲、乙、丙類の天神縁起のうち、松崎天満宮の縁起として作成されたため故意に省略をした松崎天神縁起以外にはこの段を省いたものはない。しかるに安楽寺本縁起の系統の縁起ではこの段を全て省略しているのであつて、この事は、次につづく靈験譚の部分の異同とともに時代および対象の差による北野信仰の異質化を一面では示すものであるのかもしれないが、一面では右に考えてきたように、この系統の縁起が「北野神社の縁起」を語る事から転じて「道真の受難と報復の物語」へと諸段を集約してゆこうとする姿勢を持つ事を示しているものであらうと考えられるのである。

(一)

以上、安楽寺本の系統の天神縁起には全体としては原縁起の構成に従いながらも「縁起」から「物語」——道真の受難と報復の——へと諸段を集約してゆく姿勢がある事を見てきたのであるが、この姿勢を、その底辺で支えている原理として、二つのことを発見できるように思

も昔もあらじとぞおぼゆる(豊宮崎本)

安楽寺本系の縁起は、これを変え、左のように記している。

又、次ノ年ノ春、同令旨ヲ蒙リテ云

「去年ノ春ノ十首ニ製作ノ早キ事ヲ知レリ、其上二十首一時ニ作リテシヤ」

トテ、二十ノ題ヲ酉ノ刻ノ始ニ出シ給ヘリ。サノミハ如何トゾ君皇モ思食、学生共ニイタハシガリケル。其時、菅丞相

「未承、昔モ今モ一時之中ニ二十首ノ詩作レルコトヲバ。是則、天命ヲアライデ勘責空ニヲノク」

トテ、去年ノ十首ヨリモ早ク、今年ノ二十首ヲバ酉ノ半時ニ作出シ玉ヒタリケリ。縦ヒ三十一字ノ和歌也トモ半時ニイカガ二十首ヲバ說出スベキ。支那本朝ノ不思議、和光同塵ノ垂跡カトゾ、万人舌ヲ卷タリケル。

安楽寺本系の縁起は、原縁起によりつつも、東宮の令旨を会話体に直し、その挑戦に應じる道真の自信に裏付けられた言葉や、危ぶみ、同情しながら見守る人々の様を加えるなど、話柄を具体的に辯成を色どり豊かにしようとしている。この手法は良香弓場の段にも見られ、第一部全体としては、原縁起では見ることができなかつ

た道真の新しい性格づけ——文人としての秀れた才能を持つのみならず、小ざかしい挑戦者に対して自信にあふれた言行をもつてそれを打破つてゆく行動性を持った人物としての造型をある程度進めている結果になつてゐることは否めない。

しかし、この、説話を「話」として色どり豊かにしてゆこうとする態度が最も効果的にあらわれたのは第二部、特に法性房渡河の段である。前にふれたように、この系統の天神縁起は宮中雷電のすさまじさを原縁起から脱化してかなりリアルに描き出しているが、そうしたすさまじさが次の法性房渡河の段にもひきつがれているのである。原縁起はこの個所を、

かも河の洪水もさりのきて、陸地のごとくにてとほり給しぞ、法験もめでたく、王威もおそろしき

とだけ記した、あつけない描写で終えているが、安楽寺本系縁起では、洪水のすさまじさ、伴の者の懸念、法性房の豪語、渡河中の状況、しめくりとしての中童子の秀句と、のべ八百字余りに亘つてこの個所を描写しているのである。

僧正況ヤ西坂本へ下テ内裏へ参リ玉フ。御車飛ガ如クシテ、キリンヨリモ早シ。但シ鴨河ノ洪水斜ナラズ出

河ノ底ノ深サハ牛ノ膝ニゾタチニケル。空ヲミレバ大海ノ如シ、弓手馬手ヲミレバ洪水屏風ヲ立タルガ如シ。又河岸ヨリ是ヲミレバ、御車御供ノ人々皆括リテウセ給ヌトゾ覺ヘケル。サレドモ事ユヘナク西ノ岸ニ御車アガリテ、轆ニ取付タル人々皆安堵シテ悦ビケリ。其中ニ、事ニ触ツツ口ヲカシク物マフス童子一人侍リ。ミメ、コトガラ、同輩ニスグレタリ。然ル間御イトヲシミ深クシテ、キリ物ニテゾ候ケル。此童西ノ岸ニテイツシカヲカシキ事ヲ申シタリケリ。「鳳凰ノツバサニツク蚊虻ハ量ラザルニ千里ノソラニトブ、和尚ノ御供スル我等ハヲモハザルニ大海ノ底ヲミナクグリヌ」トゾ申タリケル。然レドモ雷雨カシガマシクテ、人ノ耳ニハキコヘズゾアリケル。

描写そのものは類型的表現の連続で、抽象的な表現に止つて居り、いわゆる野趣にとんだ末端描写のおもしろさは欠けているにせよ、全体としては一種の爽快ささえ感じられるこの行動的な場面に、この縁起の変改者が一つの力点を置いたであろう事は想像に難くない。<sup>13</sup>しかし、この部分は、直前の宮中雷電の段の描写のつづきとして大きく増補され、その行動的性格といった点では他の諸段の増補変改と同一であるとはいふものの、さきに見て

テ漫々タル蒼海ニゾ似タリケル。巫ノ三峽ニ棹ヲサス船筏成トモ通フベクニ非ズ、鳥ツバサナンドハ、サリトモ通フベキニコソ有ケレドモ、雷稠クテ、百千ノ鼓ヲ打ヨリモ太多々敷、黒雲空ニ満塞、東ノ西ノ岸ノ木ノ枝モミヘズ。雨ハ車軸ノ如クシテ、滝ノ水ヲ落セルガ如シ。一ツトシテ助カルベキ事ナカリケル、惣ジテ凡夫ノ境界トシテ思ヒ寄ベキ様ゾナカリケル。其由ヲ御供ノ人々ヲノキ申タリケレバ、僧正ノ玉ハク、  
「汝等努々恐ルル事ナカレ、有驗ノ僧トシテ水火刀等ノ難ニ恐ルル事ヤアル、只憚ル事ナク車ヲ洪水ニ在

ベシ」

トゾ仰ラレケル。其時、牛飼并ニ御供ノ人々、心中ニ思ヒケルハ、哀レヨカラヌ災カナ、有驗(モ)様々コソアルベケレ、昔釈迦如来スラ、宝林長者ガ米洗テ捨ケル白水ニヲシ倒サレテ僧伽黎衣ノ御袂ヲ絞セ玉ヒケルゾカシ、況ヤ是程ノ洪水ニ車ヲトヲサン事、験アルベシトモ不覺、只今度雷ノ御折ノ味ヲシクテ此河ニ身ヲ役テ失玉ハントスルコソ悲シケレト、各皆思ヒ合リ。頻ニ僧正只ヤレヤレト仰ラルル間、牛ヲ洪水ニ追懸テケリ。御車輪スデニ河ニヒタル程ニ成ケレバ、洪水上下へ去テ車一輛トラル計リニ洞ノ如クニアキタリケリ。

きた道真の受難——報復の事件へ縁起の各段を集約してゆこうとする傾向の振幅からはむしろはみ出している。もし、法性房と怨霊の対決に力点を置くならば、当然この後につづく法性房祈禱の部分をも変改すべきであり、事実、そうした変化をとげた例は謡曲「雷電」に見えきるのであるが、この縁起では、前からの息づまる緊張はその部分までは持続せず、簡単に雷電は退散しているのである。

こうした、全体の一貫性を欠く形で各説話の「話」としての色どりを豊かにしようとし、それぞれの段でいわばドラマチックな構想をとるような変改が行われたのは、この縁起が本来は絵を伴なつていなかつた事と無関係ではないように思う。北野天神縁起の原初形態は文章だけの存在であり、絵巻の形になつたのは甲類第二種本以後であることは既に定説化しているが、先に述べたように安楽寺本系縁起の本文は絵を未だ伴なわなかつたと思われる甲類第一種本(乃至は二種本との中間的存在の本)から派生したもので、他系統の縁起が絵巻としてその発端を挿絵の方で行い、文章の方はその附随物としてむしろ類していつたのに対し、この系統の縁起はその序文に「心ヲ尽シテ是ヲ奉リ読、耳ヲ傾テ聴聞スレバ、速カニ

其人安穩ニ里繁昌ス、家ニハ風雨水火ノ難ヲサケ、人ハ疾病盜賊ノ愁サケン」と縁起聴聞の功德ヲ強調するよう  
に「語り物」として文章を成長させていつたものと思われ  
るのである。この系統の縁起本文に限つて本文の振幅  
も大きく、平仮名、片仮名、擬漢文やらの種々の形態を  
とる諸本が存在することも、このような「語り物」、あ  
るいは「読み本」としての存在がそのようにさせたと思  
えられるのである。

第二部の増補箇所で見つくる個所には、他に日蔵冥途  
記の段がある。それは道賢上人冥途記(日蔵夢記)を抄  
出した形の甲類第一徳本の該当部分を往生要集によつて  
六道、特に餓鬼道の部分で大補に増補したものであるが  
ここでも太政成徳天は隅に追いやられ、中心になるのは  
餓鬼や地獄の苦患の縁そのものである。「物語」として  
この縁起を見た場合には全くの夾雑物であるこの部分を  
かく増補したのは、この系統の縁起の変改のもう一つ  
の原理、仏教の俗的宣伝の意図が働いていることは明  
らかであり、その裏にはこの縁起作成の時代に流行した  
六道思想のあることも言うまでもない。そういつた意味  
で、この部分は根本縁起に画かれたすさまじい六道廻り  
の縁の絵と対応するものである。

借染ノ根ミヲ縁トシテ、濟度方便ノ身ト成リ給ヘリ

(八ノ四十八 上野国那波八郎大明神事) という理念の  
存在するためであつたが、本来はこの時代には「コ」話に  
属するはずの「鏡宮事」(説話自体は落語「松山鏡」に  
類似する)さえも神道集に採録された説話では鏡を冥途  
の使の近づいてくる事を人に知らせる善知識と見なし、  
これを機縁として人々が出家するという構想になつてい  
る事でもそういつた性格は明らかである。神道集にお  
いて、数ある天神縁起の諸本のうち特にこの系統の本文  
が採られたのは、後に考えるような、作者、編者層の共  
通であつたためであらうが、作品の内面的性格にも共通  
性のあることはやはり注意しなければならないのである。

(三)

右に見てきたような、この縁起の変改は、その目的と  
して仏教の俗的な尊崇を要求する記事を補つていること  
と同じ糖の両面をなしている。

この縁起が宗教的には原縁起に比べて著しく俗的、庶  
民的な色彩を濃くしていることは、例えば奇子託宣の段  
の残された部分が北野天神の神威の理由づけの理論的な

さきに、私は淨蔵加持の段にはじめじめした雰囲気  
が色濃くただよつている事にふれたのであるが、この六道  
廻りの部分でもこの雰囲気は強く感じられる。それは多  
くを原掘往生要集大文第一によるものとはいへ、こうし  
た陰惨さ、じめじめした感じをこの縁起の基調低音とし  
て重くひびきわたらせていること、さらに、流罪の段の  
親子の離別の描写、譚所の道真の嘆き、彼の死後冥途に  
遣された子等の嘆き、いわば人生の悲しさ、暗さの面を中心  
とする歌嘆的な美辞麗句の増補に力点の一つが置かれてい  
ることについては、その変改者の誰であつたかというこ  
とに深く思いを潜めなければならぬ気がするのである。

この色彩は、もともと日本の文芸のある種のものにはあ  
りふれた性格と言ひ捨ててしまえばそれまでであるが、  
特に気にかかるのは、このどす黒い影は、中世の本地物  
や真字本曾我物語などに漂つているものと同類のもので  
はないかということである。既に多くの人に言われてい  
るように、神道集に取められた本地説話には笑の要素が  
極めて乏しい。これは本地説話に「諸仏菩薩ノ我國ニ遊  
ビ玉ニハ、神明ノ神ヲ現ジテ、先ツ人胎ヲ借リツツ人身  
ヲ受テ後、憂悲苦惱ヲ身ニ受テ、苦楽ノ二事ヲ身ニ受ケ、

部分ではなく、外表的な、行為についての教誡であり、  
また日蔵冥途の段の餓鬼道墮在の業因の長々とした説明  
が原掘の要集のそれに更に付加をして日常生活における  
非道徳的な行為のみをもつてなされているといつた点に  
も表われているが、<sup>(14)</sup>特に随所に僧侶にとつて虫のいい事  
を要求していることが注意される。

たとえば、日蔵冥途の段の、延喜帝が日蔵に、善根を  
もつて救済を願う個所で、日蔵の間に對し、帝が、

帝答テノ給ク、善根ハサマク、也、一ニハ僧ノナゲキ  
ヲ助ケ、二ニハ衆生ニ染ヲアタヘ給ヘ、但シ我為ニハ  
卒都婆ヲト計仰ラレタリケル時ニ……

と答えるように原縁起をかえ、(原縁起は、善根の具体  
的内容は記していない)また仁俊阿闍梨の段で、虚言の  
報いとして狂う女房に對する世人の評が、

アラニクノ女房ヤ、マコトニ見タル事ナリトモ、僧ノ  
恥ヲバイカガ云ベキ、況ヤ虚言ヲ僧ニ云ツクル条、心  
中ノ不当サヨト、上下万人悪マザルハナカリケル。

と補われている箇所はその典型的なものである。こうし  
たあからさまな要求を考え、さきに見て来た諸傾向と考  
えあわせると、作者の如何なる層に属し、如何なる目的  
をもつてこの縁起を改変したかについてのおおよその推

測はついでくる。

もともと北野天神縁起の原本の作者が天台宗に關係した者であろうということは、源豊宗氏の慈円作者説<sup>(15)</sup>は成り立たないにせよ、諸氏の言われることであるが、<sup>(16)</sup>は臆測するに、甲類第二種本以下の絵巻になつた縁起がむしろ京の貴族や儒学の専門家の間において発達して行つたのに対し、安樂寺本系統の縁起は、天台宗の内部において語り物として育てられたのではないかという気がする。<sup>(17)</sup>もちろん、それは他の系統の縁起に、絵解に使用された時期のある事が想像されるように、必ずしも北野神社と無關係に成長したものではなかつた。北野神社が天台宗の門跡寺、曼殊院を別当寺として、天台宗の色彩を濃くしていつたことは周知のことであるが、北野文叢に記すこの縁起の所藏者に北野天満宮の寺坊の名が見えていること、また、先に引いた北野縁起三巻抄の発端についての説明で「当所にて日本我朝と書るを用」とあることが示唆するように、ある時期においては北野社の寺坊の一部では、この縁起を語つて勧進をしたのではないかとも思われるからである。おそらく絵巻になつた縁起が、「表向き」の縁起として神宝となる形で奉納されるのに（中には、神宮文庫蔵元文三年八月写の識語

のある乙類本末端の写本などが示すように、毎月拜読が行われた場合もあるが<sup>(18)</sup>）対する形で使用された場合も考えられるのである。

ともかく、この縁起の性格から帰納される改変者は、「安居院作」と表記され、天台宗の教義の色濃く漂つている神道集の編者と共通の地盤の上に存在するであろう事は疑いえない。神道集にこの系統の天神縁起が採られた理由は、先にふれたように正にこの事であつて、編者がこの系統の縁起を北野天神の「御物語」として他系統の縁起から一步出ていることを認定した事ではない。神道集編者の「文学的」感性を買いかぶつてはならない。

#### (四)

さきに見たように、神道集巻第九の本文は、安樂寺本系天神縁起の本文を母胎として、甲類第一種本の縁起の本文乃至は出典不明の事項を極めて拙劣な方法で刻み込み、最後に天神信仰の功德および天神の本地仏たる観音について等の補入をして、他の説話と同様に本迹關係の教義づけを図つてゐるが、最後にこうした補入による説話の変質について考えてみたい。

甲類第一種本をもつてした補入の態度は、先にふれたように必ずしも安樂寺本系統縁起に欠けている部分全てを補入するといつた、いわゆる集成の態度ではなく、(参考にした甲類本が省略本であつたと仮定するならともかく)その規準は私にはよく判らない。従つて結果について云々することになるが、集中的に補入された箇所の一つがさきに喩々した師輔社壇建立より延喜年中の災變、北野神壇建立の部分である事は、神道集編者がこの「北野天神御物語」を「北野天神の縁起」と考え、そのためには欠く事のできないこの部分を補入した事を示すものと考えられるのである。安樂寺本系の縁起改変者が「物語」からこの部分を省略した理由の一としては、藤原氏の尊崇云々について殊更述べたてなくても北野天神社の信仰・世俗的權威が一般に既に認められているが故の無視(勿論藤氏自体の權力の没落が背景にある)が考えられようが、

そうした外在的理由の何であるにしろ、この補入は内在的には「物語」から「縁起」への逆溯行であり、他の説話の補入の拙劣さとあわせて、「物語化」への集約をしてゆく内在律の破壊であつた。

こうしたつぎはぎをするのは、神道集編者の好きな事らしい。既に指摘されているように二ノ七、二所権現事

の、継子説話の人物と本迹の神仏のつじつまをあわせるため、他の史料では登場しない本地仏が登場したり、また三ノ十五、武蔵六所大明神事の本迹の説明のうち、河大明神の本地仏、観音の釈文の後半(約三百五十字)が——それは真字本曾找物語卷三の鶴ヶ岳八幡三所、左の御前の本地仏の記述と一致する——分割されて三ノ十六、上野国九ヶ所大明神事のうち、二宮赤城の大沼、三宮伊香保の里宮、四宮宿弥、五宮若伊香保の本地仏の釈文にはめこまれたりする箇所など、随所に発見できるのである。神道集の教義の性格を問題にする時には、こうした材料のつぎはぎを一つの条件に入れてゆかねばならない。

#### (五)

ともあれ、安樂寺本系統の天神縁起は、他の系統の天神縁起に比し、各説話を色どりゆたかに描きながら結局は道真の受難——報復の「物語」へと全体を集約する傾向を一面見せるものであつた。そしてこのような変化はお伽草子「天神本地」へと明確な形をとつて発展してゆくものであつたのである。

付記：東大図書館蔵「安樂寺縁起」は内閣文庫本よりも後出の形をもつ真名本であつた。

注

- ①「文学語学」第35号昭和四〇、三、昭和三十九年度国語国文学界の展望、中世（藤平春男）18頁
- ②「北野天神縁起の成立について」史学雑誌67の9、6頁
- ③「縁起の文学」東京教育大学文学部紀要七、19頁
- ④「北野誌」地、所収北野文叢巻十一、群書類従神祇部巻二十、菅家伝などに収めてある。
- ⑤注④の中に収めてある。
- ⑥この部分だけは託宣にはない。
- ⑦黒川本による。以下、特に注記なき場合は安樂寺本系の縁起本文は黒川本による。
- ⑧日本古典文学大系四頁
- ⑨「北野神社の創建」二 西田長男 国学院雑誌第62の12
- ⑩「我方西行ノ時ニ故ノ貞信公ハ右大弁ニテ深ク我ガ遺行ヲ歎テ更ニ兄ノ大臣ノ謀計ニ不同セキ通ニ消息状ヲ通テ専ラ無隔心キ彼ノ御ト我ト遂ニ

田長男）など。

- ⑬赤木文庫本の縁起に大乗頭戒論序を全文載せる事はこの事を支える証拠の一になる。
- ⑭奥書に左のようにある。

右此御縁起三巻洛陽北野神社御宝蔵以神書

御折師能屋房遂深齋口染自筆耳

延宝七己未五月吉辰戴写之毎月廿五日謹テ奉拝読耳

抑鈴鹿郡阿野田村赤尾天神宮依為旧跡打田氏

子孫繁榮為祈願此度左之品奉拝納之（下略）

末端の伝来を知る一つの材料になる。

怨敵ヲ結ビキ彼家ノ子孫ハ撰政不絶テ多ク朝家ニ満タリ故入道撰政ノ北野宮社ニ被過タリシ甚所悦ナリ」（北野誌、地 248頁）  
と、藤氏に対しお世辭をつかつている。

- ⑪甲類第一種本に比べ、段II説話数は減少しているが、原本が甲類第一種本と第二種本（段数が少ない）との中間のものであつた可能性もあり、必ずしも改変者の省略したものとは言いきれない。
- ⑫北野誌、地、49頁
- ⑬もつとも、法性房渡河の段を全くの創作と断定する事は躊躇される。平家物語巻八「名虎」や、流布本曾我物語巻一に法性房の鎮雷説話が叡山に秀句として伝わっていることを記しているから、この中童子の秀句も当時の口碑にあつたものかも知れない。また大平記巻二十四に松室中筆と慈慧僧正の渡河の説話を伝えるが、こういう説話にヒントを得た創作とも考えられる。

- ⑭最後の北野社靈驗譚に解脱上人が登場するのも、そうした意味で注目される。

⑮日本絵巻物全集「北野天神縁起」の解説ほか

- ⑯注②の論文、ほか、群書類題の「北野縁起」（西